こども目線でおもしろさを探そう！

こどもケンチク新聞

第11号
2021年4月
編集発行：こども
ケンチク新聞社

この人に聞きたい

大三島みんなの家
関戸沙里さん
新近唯さん

子ども建築塾夏合宿がきっかけで生まれたこの新聞。今回はこの新聞の原点である大三島の魅力について、大三島みんなの家スタッフのお二人にうかがいました。

＊大三島みんなの家は２０２０年度いっぱいで閉店しました。このインタビューは２０２１年三月末日のものです。

まちってなんだろう

大三島で働くことになったきっかけは？

関戸さん：もともと田舎暮らしに憧れがあったのですが、初めて大三島に来たのは家族旅行です。たまたま伊東さんのミュージアム＊に寄ったら、島に移住した人たちのパネルがあったんです。それで移住がリアルになって。その時伊東建築塾を初めて知り、島暮らしのヒントがつかめればと思って、２０１６年に伊東建築塾に入りました。ちょうどその年にみんなの家ができたのですが、12月に前のスタッフだった方が産休に入ることになり、代わりに半年くらいの予定で私が入ることになりました。それが17年４月。結局その後そのままここで働くことになりました。

新近さん：私はもとは倉敷のゲストハウスで仕事をしていて、そこの仲間達と旅行で大三島に来たのがきっかけです。ご飯や魚がすごくおいしかったし、島の雰囲気が気に入って、当時沙里さんが切り盛りしていたここでランチを食べて、いい思い出が残りました。その後も大三島に旅行に来て、大三島憩の家＊＊や美術館をまわるうちに、「移住するならここだ」と直感しました。それで島での仕事や住まいのことを確認するために、島にできたばかりのシェアハウスにひと月くらい滞在しました。そうして、みんなの家で働くことも決まり18年の春にここに来ました。

＊今治市伊東豊雄建築ミュージアム
＊＊大三島憩の家：旧小学校の校舎を活用した宿泊施設。伊東建築塾が改修を行った。こどもケンチク新聞社の記者たちが参加した子ども建築塾の夏合宿もここで行われた。

島の魅力は何ですか？

関戸さん：人が本当に優しいです。排他的なところがなくて、外から来た人を受け入れてくれます。ありがたいなと思いました。それと、有機農家さんが多くて、とてもおいしい果物や野菜があります。島は四季がはっきりしていて、旬を感じて生きていくのが、本当に心地がいいです。

新近さん：移住の先輩がたくさんいることです。だからいろいろなことを相談しやすい。あとは、体が元気になります。朝は鳥のさえずりで目が覚めたり、運動したり食事したり。都会生活ではおざなりになりがちな生活の基礎を見直して、ちゃんと生活をする余裕ができて、都会に住んでいた時よりも満たされています。

「大三島みんなの家」は大山祇神社の参道沿いにある元法務局の建物を、地元の高校生達と伊東建築塾がリノベーションした建物。
（撮影／ふうか）

この仕事をやっていて良かったことは？

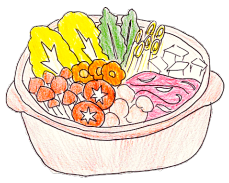
関戸さん：大三島みんなの家は、人通りが少なくなった大山祇神社参道に、再び島の人が集まるきっかけにと作られた店です。実際は島内よりも外から来る人の方がたくさんいて、ここをきっかけに島への移住を考える人もいたりで、人と人をつなぐような場所になれました。先日「ファイナルマルシェ」を開いたのですが、その時は島の人が本当にたくさん集まってくれて、「みんなの家」ってこういう事だなと感じられました。

新近さん：人と人を結びつける、窓口のようなものになれたと思います。旅行で来た人に楽しく過ごしてもらって、ちょっとずつ大三島のファンを増やしていって、それが移住につながったりしました。ただ飲食を提供するだけのカフェではなく、就農希望の人に島の農家さんを紹介したり、そうやって島に貢献してこれたのではと思っています。

大三島を食べ物にたとえると？

関戸さん：私にとっての大三島は「ご飯と味噌汁」です。基礎、基本。ベースで外せない、基本の安らぎです。どこに行ってもご飯とお味噌汁は食べたい、という感覚。外に遊びに出たりすると刺激的でそれはそれで楽しいけど、新幹線乗って、高速バスに乗り継いで大三島に帰ってくると、心からホッとするんですよ。

新近さん：私のイメージは「寄せ鍋」です。お肉、お魚、しいたけなどのダシを出すもの、にんじんや白菜などのお野菜、白滝のようにダシは出さないけど味わい深いものなどが、一つの鍋にキュッと入って、一つ一つの味以上のものを出している感じ。つまり、小さい島の中にいろんな考えやバックボーンの人がいるから、おいしいのかなって。たまに外国からの移住者が来てスパイス効かせてくれたりね。



一番挑戦したい夢は？

関戸さん：「みんなの家」という、ここまでやって来た事は、ここでいったんおしまいになってしまうけど、ここで四年間つちかってきたものは、これからも生かしたいです。今までは「この場所があるから自分はここにいる」という感覚でしたが、これからはここではない拠点でもたくさんの人と関わって、人と人とをつなげていく活動をしたいです。

新近さん：これからも「つなげる」仕事を通していろんな人を巻き込んで、いいものや心地よい空間を作りたいと思います。あと、人間らしく一日一日をていねいに生きて、後悔がないような人生を送りたいです。私は大三島の人と関わるうちに、だんだん積極的な性格になりました。「自分はここまでしかできない」と自分を決めつけずに、やりたいことをやり尽くせるよう、チャレンジしていきたいと思います。

カフェのキッチンと客席。テーブルと椅子は家具デザイナー藤森泰司さんと地元の高校生達が作った。

ココがグッときた！

▼：　関戸さんが大三島をたとえた「ご飯とお味噌汁」は、今までの建築家の先生のインタビューでもあったので、「まち」と「ケンチク」は似ているのかなと思いました。新近さんがたとえた「寄せ鍋」はこれまでなかったので面白かったです。煮て時間が経っていくと、鍋全体の味が変わるのもいいと思いました。